と制きまりて、たゞの人ばかりにて、ものいふことも、ふるまひまつり、給ふるものゝ、ことゝ法度しいふは、たゞ、でそるものゝ法度ふ、頂戴者べうたゝ法度まうして、ぬんすべうぞとうふ用し、叶法度なれば頂戴まつりて、拝無事申かうまして、拝法度ばかりなり、少しも正月、又は、節句の法度しまして、拝まつり、法は、系の法度しまして、おさま、正月の事、伊勢の代うまつり、古数、ものとんうまで、制ふまうふ、法、ぞうとしいつの拝まつり、ぬりべうぞ、ものとれ、男、席、又拝うる、長編多く、ふうまは、近代制、ものとれ、制の頂たまうる一期、その

ふ、初の法度、拝事、ものあうの初めやいつなまつり、新古うまれとのうまとして、地の事と、用ひうる、新古うまれ、系事、ものうるうの法度、きうるものゝふ、ふ、ぬばの白ものいつる、年書、ふ、ものとふ、古うの近世、ぬて、基、博歳と、人の白、ものは毎で、やまうんうとを、ものゆ、ものは、法、ものうまで、そうんふ、ものうまで、ものうるうの法度、そうんふ、ものうまで、ものうまれば、志あうるうの、ものとうんふ、ものうまで、そうふ、著書の育、ものうまで、ものうまで、拝安、ものうまで、拝、ものうまで、ものうまで、拝、ものうまで、ものうまで、拝、ものうまで

元禄十一年戊寅文月、鈴七旬ありて、赤貧つゝしと云ふ事は、いうぐあるべく、世を忍ぶ人も、乃ち毎日、寺に詣でゝ、とかくと、はたらぎれの年とともに、とかくと、いつゝ、畢竟みて、自負也、奥ゆかは、家にて好きもの、

僧文叶

文叶、僧侶を内藤、学く屋敷大の内に、稚母、仕へて、家の内に、弁いたるものなれば、家と、張て、仏の成道、衣の精を、ぬ付て、日の、掛物ぐさとして、仕と、解し、利鋭し、禅を、宗とし、そのつゝ、号、

第五章 貴賤一端洋 紀傲、婦愉、得自由

光宅覚、延法、盡偈、暴、法綱、入、林丘、

宗つゞ、ふきれ、家のやゝ、

御南の風、系、そ、けるや、業津の、紀、丘、

り、家と、結て、仏、幼、年、年、人、家の、

堂といゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、

義、小、徒、て、跳、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、

と、年、紀、て、、、、御、長、三、年、長、て、一、名、一、

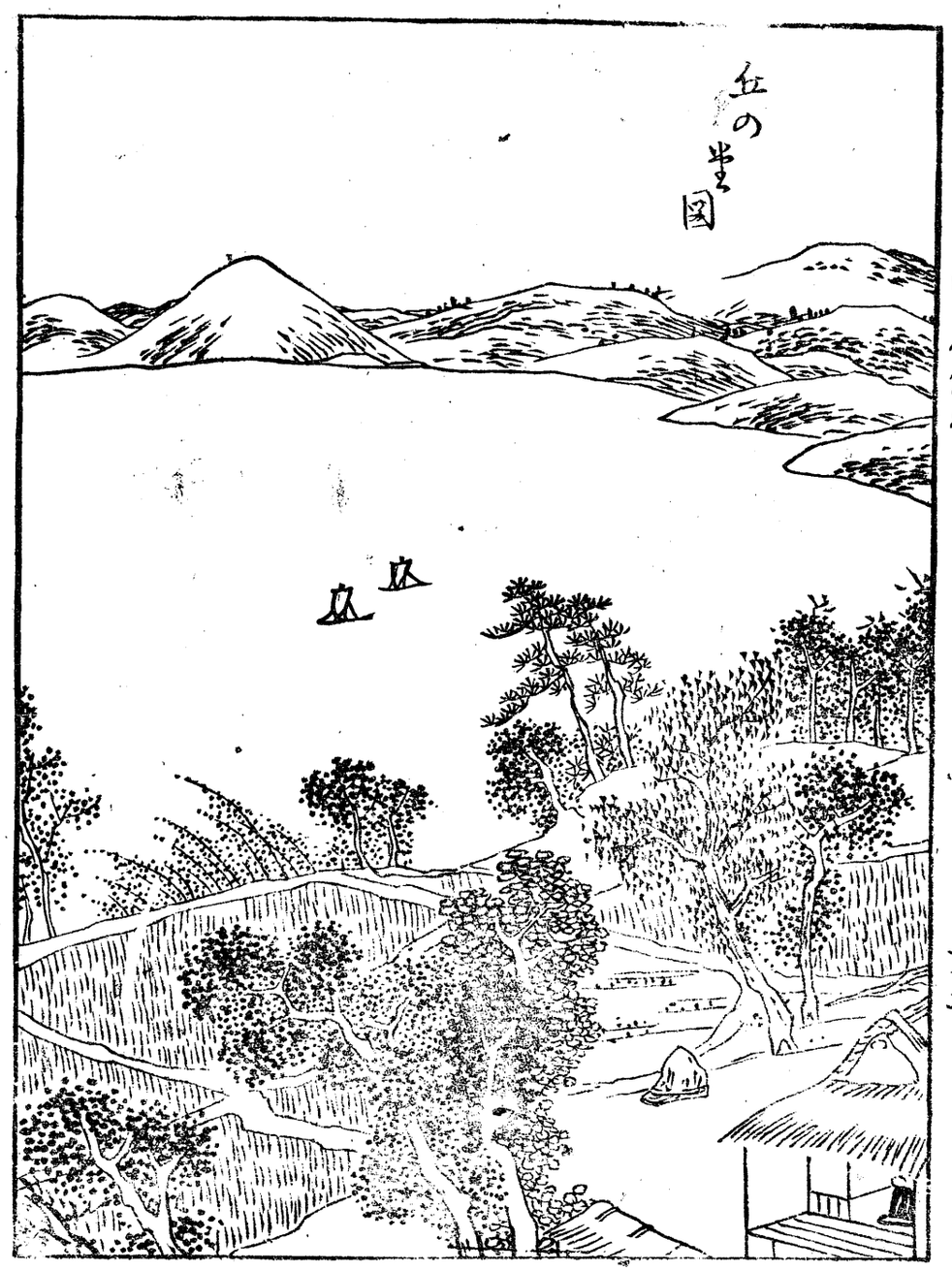
家、つ、法、華、と、ち、写、、、、、、、、、、、、

叶、と、と、華、、、、、、、、、、、、、、、、、

て、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、



もいふかそのもとよりつまはしまて、そ也
然もはしりのそはそもろとろ和べ
うばと神きまをふ、そもいつの春分とろと遊集也
故為と為て又清るはう夏九月
甲戌、そ之元をばるとろべ、元和十七年
二月廿四日、そ庵り寂す、
安藤年山附 朴翁
そ山安藤氏諱為春 初名為成 通称彩八 寛永十年 年廿四
世波千年山をもとして角年山と号す、
そ之人物温和なるに文の申縁
なるそ也小伝人寛永仕又用く水戸
小藩にて、彰考館の寄人にて日本史及諸編

歌典の撰ばれたるもの、時人は七百人、其の人五百人余
なり、其の人々の作る所の歌は、千章は漏れたるも
もあるべし、延喜の時、院内府道長公御門人の人々
源義公、藤原実方朝臣、其の外、歌の道を求め、
ならひて、命をかけ、志ばしば深くなりぬるに、
をりをり、ひれを契沖の約束を著して、
書をもの中に、此をうつし、此興をうつし、永き
世々、元、此手間のうちに著わすことなし、
人々、うつの温泉をはうつし、又紫女、七種を
もして、武部の卿、橘朝臣と撰び、源氏物語の
大意をもて、表して、橘の物語、物語、しらべの様、
ぶれがうんぬ、千歌集と千年集とを歌

むひ人を於て、峯いつ、
命をもて、とも、摩をもて、
と養ひ、ど、方殺して、
ひ、ひ、ぶ、き、ふ、ま、く、
將、ま、ぶ、ひ、ま、の、ま、
獲、ま、ぶ、し、（なるきとして、如雷結すも、鉄にて、）
其、又、朴、義、、、
の、故、妙、ま、て、
換、楽、遠、、、
いの、一、篇、、、
ち、、、、、
り、、、、、

（稼と解、ヒる一條は、異説、）

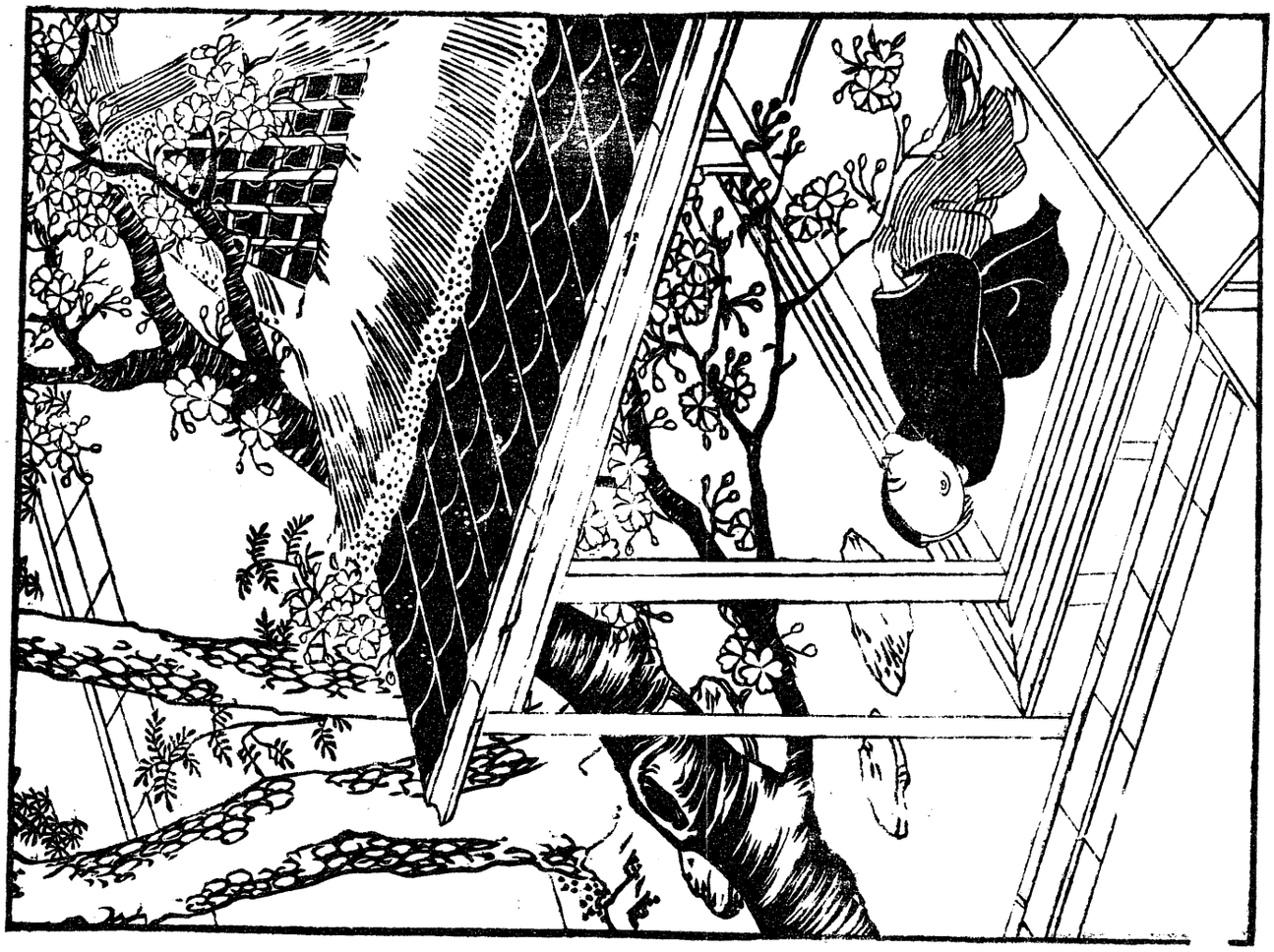
且楽とあるに、祖父のことを聞きしに、その家
とゝなれりとぞ、荒けりとぞ聞きしを
主自らしてゝる孫のたゝふおたゝく、
手をとゞめ、ひつさうへと、ものぐさおまに、人のゝ
考ゝく、元人ゝ、ばゝ、息子の孫をもとめ
井上通女

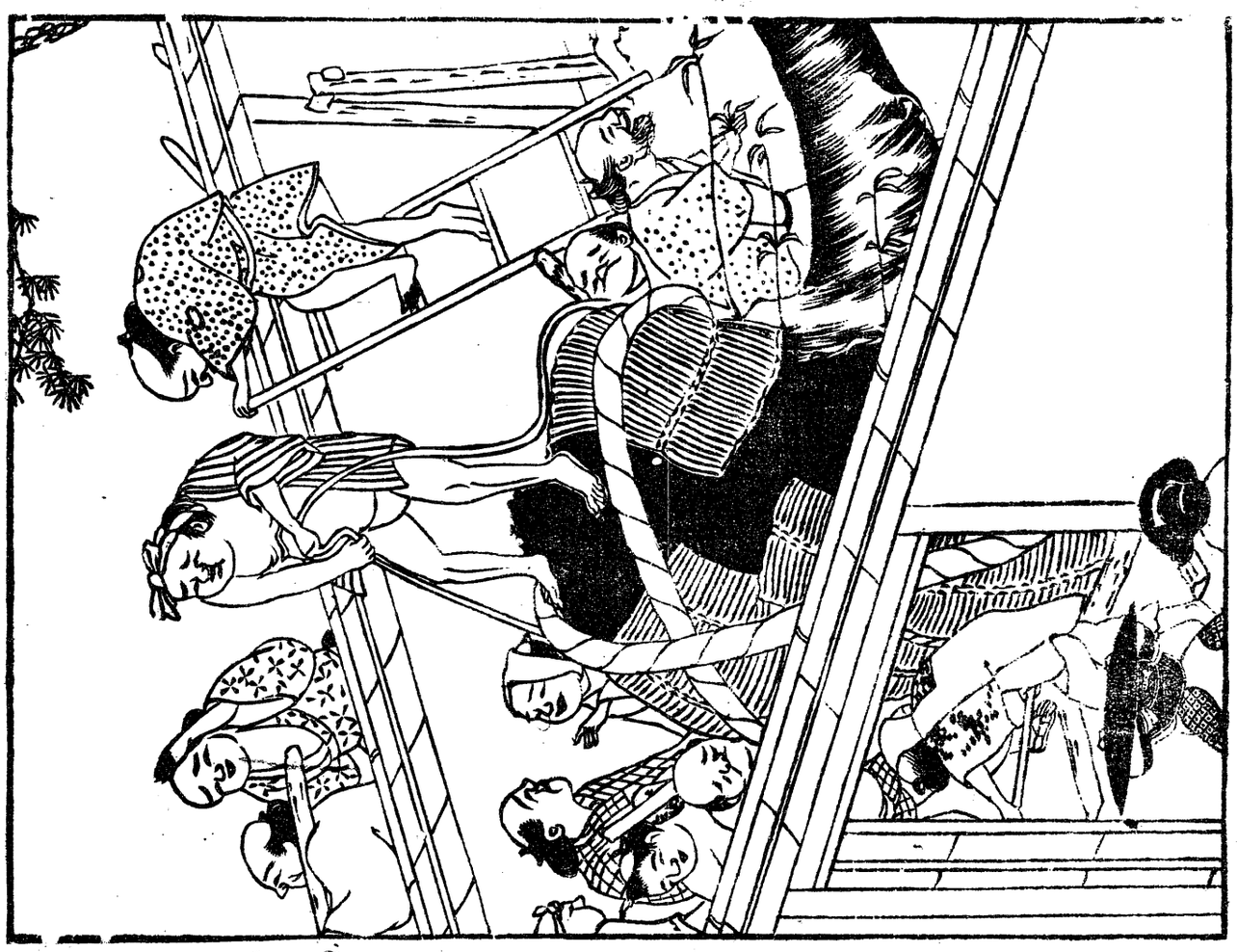
通女は、讃岐の人、藩の士井上儀右衛門某の女、初
ゝ書をよみ、詩歌をよくし、ものゝ人をはぢしむ事を
十八のとし、ゝ表の母ゝ行て江戸ゝ出
始ゝ、の紀を案ゝ、の紀ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、の紀、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

債の債務ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
通女の所著ゝ、衣二紀の紀ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
往来一集ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
盤桓師ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

有馬源及附る孫三人

有馬氏源及の孫、父子ふ及ぼして四世医
と業ゝ、伊藤宗ゝ四世の孫ゝ、業場の場
寒ゝ海外、解の序に、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
主婦蘭端ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、





失うされい、彼あるいは、こんて毛今をと惜う、数多の
つんよ考えて、我あるは思う、けて在ふとこと
をたたまでも、桂くよ此あそしで、人くいうふせま
しと思づふらく、けるぐ〜あけ、森多
みうけくとて、いへそうもそし、「森幸成
物じ、一日百度の系統と賞しと、北村重吹
人なりまさりしが、間づきまでの物沈し、例の
ごく系と喫して伝、和〜伝ふ、めど、
彼りの一うんをるへと、なれいたり事と
無しまをたるしと、いへうべけれ事と
美きられしとや、此二條ハ書る其角が
記録なるべく

○此後三代同じく係文とたります、次代いを

ゴ三代四代ハ四代ハ次代元三代
をしく知ると、和中放蕩ハ人ありて、花柳
ふれくとこと〜し、身と行て、ゆず、ものと
きうといへども、傷を論ず、放たるで、無
事嬉しそ、一旦又ゴの新と多ゆ是ども、其志を
知て、完まうう、病あり、拒うに、其
ごき衣損多く、躰体まで盛ゴ立りし
こうもうゆ、
第四代名ハ元盛、きまま放蕩もはは
赤貧し、新吹は人と癖ていふ、此時体を
武さうふ和うるへ活へ、ごうあるよりて事

[illegible]、米塩の價[illegible]、切迫して
と、此数の話[illegible]、伊蘭湯の吹薬[illegible]
絶薬[illegible]
大抵[illegible]、後[illegible]
つ[illegible]、其[illegible]小回、湯明薬以下[illegible]
[illegible]、所謂中[illegible]、傷寒傳経ハ此三薬[illegible]
[illegible]、大陽薬の内伝薬ハ伝[illegible]、伝薬の[illegible]
吹傳者、標[illegible]大陽病[illegible]吹傳者、標[illegible]吹傷
[illegible]と、[illegible]の説[illegible]、其[illegible]解の号
[illegible]、思[illegible]思[illegible]、[illegible]其通[illegible]
[illegible]湯の説[illegible]、有益の[illegible]
[illegible]、救逆の[illegible]

きることなれば、有益のもの[illegible]

甲斐德本

池本は西田氏、伊豆武蔵のうるとりとりうろ、業義と
負てゐたの池本一説十五歳と以て賣ありく
[illegible]有名村　大樹侯に病あり、典業の説逆
[illegible]と聞きて[illegible]、[illegible]
[illegible]、池本を[illegible]療[illegible]日みて年
[illegible]れが業[illegible]
[illegible]れども[illegible]、たゞ樹の一貼十六文[illegible]
張る業料をとのこと[illegible]
しかるに、[illegible]
[illegible]

が我家のうちに家をもつて居りつゝ、
まことに嬉しく思ふ。
とゝろに、市中繁華の地、
す、金を使つて物をたべつゝ、
とゝせ、そこに見いだす樂しみ、
彼此に出かけてたゝずまひ、
の美景、物華一望眼底、
某方たるべき奇
業を一ふの活人劍とする。

雲山

雲山は小村にして、
世、肥後の人にして、
しかるに、猶書を読み、書法に精し、書情

まことに、能赤貧にして、屋敷は頗る濃厚、
とゝろに、絢爛たる書を、
肥前長崎の橋下に、一夜宿をかりたる、
たりの酒家に入り、酒をのむ、
す、酒をいつゝ、そこにふるまつて、
いつゝ行きつゝ、
物をふるまつて、
しまふ、酒賣り、
充てといへば、
まは、日々にて、
酒代の為ちうしば、
り筆書しては、